

チンギス・カンの前半生 その 8
－タタルの制圧－

Former half-life of Chinggis Qan No.8
－Suppress Tatar－

2020年7月31日

Jul.31,2020

安田公男

Kimio Yasuda

URL : chinggis-ff

はじめに

テムジン は部族内の敵対勢力であったジュルキン氏族を滅した。オン・カン はメルキト部族領内深く侵攻して、部族長のトクトア・ベキを遠くバルグジンへ追いやり北方からの圧力を無くした。部族内の地位を安定なものにした二人は、それ以降例年のように他部族への攻撃を行い始める。ウルジャ河での戦い以降金国との関係が密になり、金国にとって憂いとなる部族の征討を委託されたとも考えられている。1199年、手始めにナイマン部族のブイルク・カン領を劫掠した。翌1,200年、二人はタイチュート部族を征服した。彼らを吸収したテムジンは、真の意味でのモンゴル部族のカンとなった。兵力を増したテムジンは、あらたな制覇への道を歩み始める。

1. 史書の内容

ダラン・ネムルゲスのタタル部族、グル・カンとなったジャムカ、ウルクイ・シルケルジト地方のタタル部族を制圧する過程を考察する。

1. 2 1201年から1202年春の記事

項目	年次	記事内容(抄)
1	1201 秋冬	ダラン・ネムルゲス地方のタタルの一党を討った。戦いに先立ち、軍律を定めた。
2		コンギラト部はテムジン陣営につこうと近づいてきたが、カサルがコンギラト部を攻撃した。彼らは信用しなくなりジャムカ方へと引き返した。
3		コンギラト部は首領を失い、ジャムカ部と一緒にになった。イキラス、コルラス部などとケン河に集まり、ジャムカをグル・カンに擁立した。トリベル河で岸边を蹴り、林の木を斬って誓った。
4		テムジンはこの動きを密告によって知って出兵し、カイラル・イディクルカンでジャムカを破った。コンギラト部は降った。
5	1202 春	ウルフイ・シルジュルジュト（ウルクイ・シルケルジト）河に出兵し、アルチ・タタルとチャガン・タタルを討った。ダリダイ、クチャル、アルタンは、前年決めた軍律を守らず、敵が遺棄した財物に立ち止まり、自分の物にした。これを、クビライ、ジェベの二人を遣って没収し、分けた。
6	1202 秋	テムジンとオン・カンは、メルキトのトクトア、ナイマンのブイルク・カンとクイテンで戦い、勝った。ジャムカは戦場へ向かう途中でそれを知り、仲間の部族から略奪して、オン・カンの元に向かった。

2. 考察

2.1 ダラン・ネムルゲス地方のタタルの征討

2.1.1 ダラン・ネムルゲス地方

1,200年の冬をチェクチェル山で冬営したテムジンは、春になって一旦ケルレン河の本拠地、アブジア・コデゲリ（現アウラガ遺跡）に帰っただろう。その年の秋になって、ダラン・ネムルゲス地方のタタルの征討に出発したと思われる。ただ、その位置について、納得のいく説明を筆者は見ない。しかしこれは簡単であろう。前年の1,200年にブイル湖近辺のタタルと諸族を下していた。1,202年はウルクイ・シルケルジト河地方のタタルを征討することになる。その地は河の名からして今の東西ウジュムチンからシリル・ゴルで間違いないから、二つの戦いの間になる1,201年の戦場は、二つの地域の間である。金国がタタル征討をしたときに、完顔安国が進んだ多泉子地方、現在はモンゴル国の一番東となるドルノド県のタムサグ・ブラグー帯である。ここが中国の内モンゴル地域に突出した形になっているのは、内モンゴルより50mほど高い台地を成しており、モンゴル

本土とは連続した地形だからである。また、ドルノド県の東には Numrug 国立公園があり、ネムルゲスからの変化に思える。

ダラン・ネムルゲスは「70の蔽い」の意味らしい。理由を考えると、家の屋根からきているのではなかろうか。現在の住居であるゲルも、冬期の強い風を防ぐ為に北に山を負った地形の所で冬営する。しかし、この地には高い山がなく、冬を越すのに工夫が要ったはずだ。当時ゲルはあっても折りたたみ出来ず、移動時は車の上か、簡易的なテントで寝泊まりしていたようだ。そのような住居で、この地の冬越しは難しかったはずだ。そもそも、ゲルは、円錐形の骨組みを皮等で蔽ったテント形式のものと、地上に掘った穴に屋根をかぶせたものとの、両方からの発展が考えられている(1)。モンゴル部族の実質的始祖であるボドンチャルが草の家に住んでいたとあるのは、屋根が草葺きの後者のような家だったのではなかろうか。この地も、冬は半地下式の家の方が有利だったはずだ。そのようなものが多くあれば、屋根が地面から飛び出たような眺めが特徴的になるので、このような名になるのではないかと思う。現在、タムサグ・ブラグには町がないが、100年前の地図を見ると、町も寺院もあった。GMapで見ると、住居跡らしきものが多くある。単なる穴なのか固定家屋の土台跡なのかは分からない。他地域にはあまり見られない眺めで、どういう家があったのか知りたいが情報が乏しい。

2.1.2 侵攻

シラ・ケールを出発したテムジン本軍は、旧タイチュート軍と現在のチョイバルサンで集結し、チクルグ山（現在のバルーン・マタド山）に進んでから、タムサグ・ブラグ（多泉子）を目指したと思われる。北のブイル湖方面から進む別働隊、多分カサル隊がいただろう。この戦いにはオン・カン軍が加わっていない。恐らく、メルキトの不穏な動きがあつて国を離れられなかったのだろう。だがテムジンには新たに獲得したタイチュートの兵力があるので戦力は十分だったと思われる。この地域のタタルの制圧も困難なく進んだようだ。この地の南にもタタルはいるが、援軍は来なかった。住んでいる地域間でタタルは昔から仲が悪く、協力できなかつたらしい。だが、そっち方面へ逃げたタタルは多かつたと思われる。

2.1.3 軍律を定める

秘史はこの戦いで、他書は次のウルクイ・シルケルジト河の戦いで、テムジンが軍律を定めたとする。1つは、「敵に打ち勝ち追撃しているときに、敵の残した財物を回収するために立ち止まるな。戦いの後でまとめてから公平に分ける」。2つは、「敵に劣勢となつても、必ず戦い開始の地点で踏み留まれ。そうしない者は斬る」であつた。財物に目が行けば進軍速度が落ちる。戦いで不利になつてズルズルと退却されたら、後続する兵士の士気を削ぐ。いずれも陣形が乱れ強い軍にはなれない。この戦いから、旧タイチュートの兵がいたはずである。前線に立たされるのは、常に彼らのような新規参入兵である。彼らにそれぞれの流儀で戦われては軍の統制がとれない。だから、この戦いの時に軍律を決めたと考える。ウルクイ・シルケルジト河地方のタタルは富強であつたようなので、それを念頭に軍律を定めたとも考えられる。運用には時間がかかるので、その一つ前の戦いで決められたとしたい。

2.1.4 コンギラト族の動き

戦いがほぼ終わった頃、コンギラト部族の一団がテムジンに帰属しようとやって来た。コンギラトにはテムジンの母親の出身氏族であるオルクヌート氏や、妻のボルテの出身氏族であるボスクル氏などがあつた。モンゴル部族と婚姻関係が続けて来た部族だから、テムジン方に付こうとしても不思議ではない。コンギラトは、恐らくテムジンにその意向を知らせており、テムジンも配下の主な将軍には伝えていたはずだ。だが、その一部が彼らの意向を確かめることなく襲つたようだ。タタルの掃討戦をやっている時にコンギラトと出くわしたので、間違えて攻撃してしまったのかもしれない。からかったとする史書もある。それをやってしまったのがカサル軍で、ダラン・ネムルゲス地方の北の地域にいたのだろう。だが、襲われたコンギラトにしてみれば心外である。怒って引き上げ、ジャムカ側に行ってしまった。テムジンは当然カサルに怒り心頭となり厳しく責めたようだ。これが遠因になったのかどうか、カサルは一時兄を離れて、オン・カン陣営に身を置くことになる。

2.2 ジャムカ

2.2.1 ジャムカ、グル・カンとなる

前年、コンギラト、カタギン、サルジウトなどの諸族はタタル部族と共に、ブイル湖近くでテムジン、オン・カン軍に挑んだものの敗れた。コンギラト部族領は無事なので帰る場所があつたが、カタギン等は自領がタイチュート領に近いので、もう帰れなかつたと思われる。タタルの残党も同じ境遇だつた。彼らはコンギラトの更に北を目指した。その方向、アルグン河にケン河が合流する辺りにジャムカがいたのだろう。彼はタイチュートとの関係が深かつたにも拘わらず、前年のタイチュート滅亡の騒乱に名が全く出てこない。恐らく、ナイマン攻撃に参加した時に、タイチュート側に付くな、とオン・カンに言い含められていたのだろう。それで、騒乱に巻き込まれる恐れのないケン河流域にあらかじめ移動して、騒乱を傍観していたものと思われる。そこに諸族は寄つて行つた。彼らが再反撃するには、かつてテムジンに立ち向かつたことのあるジャムカの力と名前が是非欲しい。だがジャムカは、オン・カンとの約束があるので承諾を渋つただろう。諸族の奥の手がグル・カンの称号だつた。カンにはなれない家柄に生まれたジャムカの名誉心をくすぐつたと思われる。翌1,201年の春、イキラス、コルラスなどのコンギラトの一部氏族も加わつた。集史には彼らが首領を失つていたとあるので、前年の戦いの時のことだつたのではなからうか。秘史によれば、集まつた諸族はアルクイ泉で白馬の胴を斬つて誓い、ジャムカをグル・カンに推戴した、とある。しかしこの儀式は、他書では前年のことである。今回は、トゥリベル（禿律別兒）河の側で、約束に違えればこの河岸のように蹴られ、林の木のように切られる、として誓つたとする。トゥリベル河は、ケン河の直ぐ北にある現在の得尔布尔（トルブル）河であろう(2)。グル・カンになつた時の事としては少々貧弱な儀式だが、彼らは経済的な余力が少なくなつていたと思われるので、派手に馬を切るなどと言うことはしなかつたと思う。ともあれ、ジャムカが諸族を統合してグル・カンになつたのである。彼の心は高揚しただろう。

2.2.2 グル・カンの意味

この言葉はチュルク語で「全てのカン」の意味であり、西遼（カラ・キタイ）を建設した耶律大石が使い始めた。後にトオリルの叔父がトオリルを追い出してグル・カンと名乗り、ジャムカで 3 例目となる。この称号はカラ・キタイが元祖であるから、それを名乗ったジャムカ達は親カラ・キタイ派であり、テムジン、オン・カンの親金国派と草原世界を二分して争ったと言う説がある。筆者も論文でこのことに触れたが、これはグル・カンという称号からの推測であり、ジャムカたちがカラ・キタイと連携を取っていた直接の証拠はもっていない。確かに、カラ・キタイという国は、東方草原に暮らしている遊牧民にとって憧憬の対象だったろう。彼らの先祖が耶律大石の夢に乗り、西に向かったのだ。そして、独立した国を打ち立てるといふ、偉業を成し遂げた。それはたかだか 70 年ほど前のことに過ぎない。自分の身内の誰それが行って大成功したという記憶もまだ生々しいのである。トオリルが弟に追われた時に、そこに援助を頼みに行ったのも、向こうに血縁がいたからだろう。だが、良い返事はもらえなかった。それも当然で、カラ・キタイまでは直線距離で 2,600km もある。東の漢土に向かうには、ゴビ地帯はあっても平坦な道と、ある程度の水草がある。ルートと季節さえ選べば、大興安嶺山脈や陰山山脈の直前までの移動は易しい。それに対し、カラ・キタイまでは山脈も砂漠も大河も越えなければならない。独立国の西夏に天山ウイグル国もある。進路方向は常に変わって交通の困難さは比べものにならない。本 HP の「長春真人の旅」を読んでもらえれば理解できよう。トオリルはそこから帰ってくる時に辛酸をなめているのである。始祖の耶律大石には東方の地を回復したい欲望があったようだが、後継者にはそんな気持ちはもうなくなっており、現在の領地経営で満足していただろう。それがトオリルへの返事だったと思われる。彼らが東方の遊牧世界に未練があったのなら、トオリルが食に困るような状態で還さなかつたらう。後年ジャムカが行き着いた先もナイマン止まりであり、全てを失ってもタンルー山というケムケムジュートとの境に留まっていた。カラ・キタイのことなど念頭になかった証拠である。グル・カンは語調の良さと、耶律大石の成功にあやかって用いられたと考える。

2.3 ジャムカと戦う

ダラン・ネムルゲスの戦いが終わり、テムジンが戦いで消耗したと思われる頃を狙って、グル・カンとなったジャムカは動き出したはずだ。オン・カンが今回はいないので、テムジンとは存分に戦える。だが、その出動も内通する者がいた。元史と親征録はタカイハ、集史と秘史はコリダイだとする。知らせに来たのは一人だけではなかったのだろう。元史と親征録は戦場をカイラル・テニクルカン（集史はイディクルカン）の野、と伝える。カイラルは今のハイラル河であろうが、テニクルカンの意味は不明である。地形と交通路から見れば、コレン湖の北、エルグネ河にハイラル河が合流するあたりか、現在のホロンバイル市付近だろう。ここでは、アライ泉に近い前者と考えておく。ともかく、これも問題なく打ち破り、ジャムカは逃げた。コンギラト部は下った、とされているが、ほとんど戦わずに降伏したのではなかろうか。ここでも長距離移動を苦しめないテムジン軍の動きが目立つ。

2.3 テムジン、占領地で冬を越す

テムジンはダラン・ネムルゲスのタタルとジャムカに勝った。だが、自領に帰らず、占領地近くで冬を越したかのも知れない。既に述べたが、春は遊牧民にとって、生まれてきた子畜の世話で重要な時期だ。農民で言えば種蒔きの季節である。冬を越した馬も痩せているので、遊牧民同士は互いにそんな時の攻撃はしない慣習である。タタル側は、テムジン軍は近くで冬営しているが攻めて来るのは秋以降、と考えていただろう。テムジン側も、春の戦いはウルジャ河の時だけである。本当は春に戦いたくないが、どうしてもそうせざるを得ない事情があった。オン・カンから、メルキト方面の動きが活発で、ナイマンのブイルク・カンと連合して攻撃してくるらしいとの情報が入っていたと思われる。その時期が来年の秋冬と見込まれていた。いったん自領に引き返し、そっち方面に対処する手もあったが、ゴビ砂漠経由でナイマンとタタルが連携を取っている可能性が高かった。タタルを叩いておかなければ背後を突かれる恐れがある。敗残軍ではあるが、ジャムカ達にもメルキトは連絡を取り、後ろから襲えと伝えるだろう。本当はしたくないが、どうしても年明けの春に、ウルクイ・シルケルジト河のタタルだけは征討しておく必要があった。

図1 ダラン・ネムルゲスとジャムカとの戦いにおける各軍進路



2.3 ウルクイ・シルゲルジト河のタタルを攻める

2.3.1 ウルクイ・シルゲルジト河地方

この地域は、現在の東西ウジュムチンからシリン・ゴルの地域である(図2)。東ウジュムチン(モンゴル名、ウリヤスタイ)に東から流れて来るのが烏拉蓋河(ウラカイ)である。この地方は河が多く牧草に恵まれているので家畜が良く育つ。漢土にも近いので、貿易から上がる利益も大きかっただろう。この地のタタル部族は裕福であったと思われる。

ウルクイには、「のろのろと、水流の弱い」の意が、シルゲルジトには、「ざわめく、ふるえる」の意が与えられている(3)。モンゴルの河を日本人が見ると、どれも震えているようにしか見えない

が、この辺りの河は一段と震え方がすごい（図2）。シルゲルジト河、即ち震える河は、昔の地図を見ると、ウルクイ河の途中に北から流れ込む河となっている。だが、この地域の河の流れ方、というか震え方をみると、この河だけではなく、この地域に流れる全ての河、即ち地域全体のことを指しているように思える。諸河川が流れ込むウルクイ河とシリン河は、海がないので河尻は干上がって終わる、いわゆる尻無川で、塩分が集積し白い大地となる河尻が特徴的である。ウルクイ河のように、流れが終わる前から、既に塩地化しているものもある。大興安嶺山脈に近いこの地の南部、西ウジュムチンからシリン・ゴル付近が中心地だったのだろう。

図2 ウルクイ・シルゲルジト河地方



2.3.2 侵攻

予期せぬ春の季節の攻撃に、この地に住んでいたアルチ・タタル、チャガン・タタルなどは逃げ惑うだけだったようだ。彼らは、貴重な物品を捨てながら逃走した。少しでも追撃者の速度を落とそうとする狙いだった。テムジンの軍律制定は、こういう物に気を止めて追撃速度を緩めるなどの目的だったが、三人がこれを破った。叔父のダリダイ、父の兄の子のクチャル、ジョチ・カンの弟のアルタン達の親族で、叔父は勿論、いずれもテムジンより年長者だったと思われる。数年前、ウルジャ河の戦いでタタルから得た戦利品に、モンゴル部族は驚嘆していた。そのような物品が沢山あり、三人は足を止めてしまったと思われる。タタルが、ケルレン河以北の部族より、相当に裕福だった証拠である。

2.3.3 軍律違反者の処置

テムジン政権の中枢をしめていたと思われるこれら親族が違反をした。三人が後に恨んで反逆することを考えると、自分たちは軍律の適用外と思っていたと思われる。だが、テムジンは見逃さな

かった。親族から財貨を取り上げ、公平に分配した。新規参入兵に例外を見せると、規律が弛緩してしまうからである。その財貨を取りに行かせたのが、クビライとジェベで、二人とも多分三十歳前後と思われる。あまりはつきりしないが、クビライのバルラス氏族は、テムジンの曾祖父か、更に数代遡った祖先からの系統らしい。早くからテムジンと行動を共にして来た人物だ。取り上げられる身内からしたら、若造で気に入らないが、一応一族と言って良い人物である。ところがジェベは、元タイチュート氏族出身の上に身分が低かった。タイチュートを離れ、良い暮らし場所を求めて放浪していたところ、テムジンの評判を聞いて身を寄せたという人物だ。ダリダイらにしてみると、なぜ、こんなどこの馬の骨か分からない人間を寄越して、俺たちの物を取り上げるのか、という不快感が強かっただろう。一方、ジェベがテムジンに信頼されているのを見た旧タイチュート兵は、自分たちもちゃんと働けばカンが公平に見てくれる、と感動しただろう。テムジンは、キヤトとタイチュートに別れていたモンゴルが完全な一体のものである、というメッセージを、誰にでも分かる形で示したのだ。他部族の兵などにも、その心は通じたに違いない。クビライとジェベは、ジェルメ、スブタイと共に後に勇将として知られ、テムジンの四狗と呼ばれるようになる。

2.3.3 タタルの戦後処理

秘史の内容によると、テムジンはここで二つの戦後処理をした。一つは、タタル部族のトクリウト氏の首領の娘であるイエスイ、イエスゲンの二人を妃に迎えたことである。テムジンは先進部族の指導者の、垢抜けた娘を手に入れ、征服欲を大いに満足させただろう。彼女たち二人が属したトクリウト氏はタタル部族の中でも親金国的で、裕福であったのだろう。トクリウト氏族出身者が後に活躍しているところを見ると、このタタル部族を取り込もうとする目的が大きかったのに違いない。二つ目は、タタルの男たちを惨殺したことである。対象となった氏族は、アルチ・タタルやチャガン・タタルなどであったようだ。かつて父に毒を盛ったのが、この二つの部族だったのかも知れない。復讐以外にも、モンゴルの主軍がこの地を去った後の占領地行政をやりやすくする目的もあっただろう。捕らえたばかりのタタルの男達を直ぐに兵士として駆り出すことは出来ない。また、人数が多いと、残留する監視部隊の人数も多くしなければならない。そこで、成人男子を間引いたと思われる。

2.3.4 過去の戦後処理

さて、ここで振り返らなければならないのが、先の2年間で打ち破ったタイチュート氏族やタタル部族のことである。秘史にはタイチュート氏族を破ったときのこととして、彼らの主立った人々を子々孫々に至るまで皆殺しにした、とある。これだけを読むと、首脳陣以外の人々は助けられたのだろう。ソルカンシラ親子、ジェベ、ナヤーなど、タイチュート氏族からテムジンに帰順していた者達もおおかったようだ。そのような人々にも残留していた親族があっただろうから、抵抗さえしなければ助けられていたであろう。タイチュートの若者を戦力に加えるのにも、同じモンゴル部族なので、大きな抵抗はなかったはずだ。一方、ブイル湖近辺のタタルはアンバカイ・カンとオキン・バルカクを陥れて金国に引き渡した張本人であった。復讐は激しかったと思うが、何も記されていない。だが、その冬テムジンが、本拠地よりかなり東のチェクテル山で冬ごもりしたとある。本拠地のアブジア・コデゲリまで400kmほどなので帰ろうと思えば帰れたであろうが、それが出

来ないほどギリギリまで現地に残っていたと思われる。恐らく、逃亡したその地のタタルを追って、しらみつぶしに処分していたのではなかろうか。それで本拠地に帰る時間がなくなったのだろう。その翌年のダラン・ネムルゲスのタタルについても特に記事はないが、同じようなことがあったと考えて間違いあるまい。この2年後、オン・カンに追われたテムジンがこの辺りを通過しているが、出会った部族はコンギラトしか記されていない。タタルは一掃されていたと考えるべきだろう。カサルの妻のように、モンゴル部族内で匿った例はいくらかあったはずだ。

2.3.4 オン・カンが来た理由

テムジンが戦後処理を終わらせ、夏の暑を避けて人馬を休ませていた頃、オン・カンがやって来た。テムジンからタタル戦の決着が付いたとの連絡を受けてのことだろう。本領の方が不安なので、そんなに多くの兵は連れていなかったと思われる。わざわざやって来たのは、金国へタタル征討が決着を見たことを報告する目的だったと考える。金国からお褒めの言葉をもらって、彼はうれしかっただろう。だが、そんな時間は長く続かなかった。チクルグ山方面から伝令がやって来て、ナイマンのブイルク・カンの軍勢がメルキトに向かって移動中との報告が届いたのだ。

2.3.5 クイテンの戦い

テムジンとオン・カンは速やかに自領目指して兵を還した。その年の冬の初め頃であろうか、戦いが起きた。戦場は現在の工業都市ダルハン（別名クイテン）であり、史書に出てくるアラン塞は現在のウラン・ヘレム遺跡である。ウルクイ・シルゲルジト地域に居たときに、メルキトとナイマンが攻めてきたとする集史の記述は誤りである。「クイテンの戦場はどこか」として既にまとめた。

4. 参考文献

<史料>

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全釈、上、下」風間書房、東京

：村上正二(1970)「モンゴル秘史1, 2, 3」平凡社、東京

『集史』：『史集』(1983)、商務印書館、北京

：ドーソン著、佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史1」平凡社、東京

『元史』宋濂編：「元史」(1976)中華書局、北京

『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注、文求堂蔵版(1910)、国立国会図書館近代デジタルライブラリー

<参考資料>

(1) 布野修司(2005)「世界住居誌」18-19頁、昭和堂、京都

以上

改訂履歴

2020年7月31日 初版